

# 神話の心理

東京帝國大學文科  
大學助教授文學士

桑 田 芳 藏

私はお話をすることが極めて拙でありますので、斯ういふところへ出てお話することはあまり氣が進まないのですが是非にといふおたのみでありましたので、出てまゐつたわけでありませう。それで先づ話し下手のところは御辛抱願ふとして、本題に入るのでありますが、私の今お話し致さうとして居る「神話の心理」といふ主題は皆さんの従事していらつしやる御仕事と多少關係のある主題であると思つて、特に選んでまゐつたわけでありませう。

先づ、神話は想像作用の産物であるといふことを申し上げます。心理學の方では、見るは、た、ら、きと、か、聞、く、は、た、ら、きと、か、乃、至、聯、想、と、か、言、ふ、や、う、な、は、た、ら、き、は、い、ろ、く、の、機、械、を、用、ひ、て、實、験、し、調、査、す、る、の

であります。想像や思考のはたらきはかなり複雑なはたらきでありますから、實驗を用ひて之を精密に研究することは不可能であります。それですから想像作用を研究するには想像作用の産物を捉へて研究するのであります。つまり、神話といふやうな現象を捉へて、その中にはたらいてゐる心理作用を調べるのであります。これは心理學の研究方法の一つでありまして、言語を捉へてその中にはたらいてゐる思考作用を研究するといふやうな場合と同じであります。先づ以上のやうなわけで神話を想像の産物と見るのであります。歴史的の譚とか野蠻人の間に行はれてゐる話とか、斯ういふものを借り物にして、その中に入つてゐる想像作用を調べるのであります。

神話を神話そのものとして歴史的に研究することも出来ませう、例へばこの神話は何處に發生して、如何なる經路をたどつて、何處に傳へられたかといふやうな研究も行はれるのであります。しかし、こゝでは神話を心理學研究の材料として扱ふのであります。

さて、神話といふ言葉でありますが、その言葉は誰が作つたものか知りませんが、あまり適當な言葉ではありません。日本には昔八百萬の神々があつて、それらの神々に關する話があります。これらの話を一口に神話と言へば言ふのであります。が、今學問上で神話といふのはそれよりももつと廣い意味を持つて居ります、尤も日本の昔の神話のやうなものが、神話の大部分であることは言ふまでもありませんが、神話が之にのみ限られると考へてはいけないのであります、もつといろゝの話を總括して神話といふのであります。英語に所謂 *myths* であります。

それでは何ういふ話を神話といふか、といふことが問題になつて來ます。<sup>52</sup>この問題に對しては神話の種類を舉げればいゝわけであります。それで次に少しく神話の種類に就てお話し致します。

先づ第一に靈魂の觀念であります。靈魂といふやうなものが實際に存在するとは吾々は考へません、しかし人が死んだ時に何か魂たましひといつたやうなものが其處等邊にふはゞしてゐるのではあるまいかといふやうなことを今でも考へる人があります。昔は無論斯ういふ考へがたまねく行はれてゐたのであります、今でも南洋の土人、アイヌ、アフリカの土人、臺灣の土人の中には靈魂の考へが著しく行はれてゐます。是等の土人の間に於ては靈魂は夜その遺族のところに見れます、而して多くの場合遺族に害を加へるのであります。斯ういふ風な靈魂とか幽靈とか言ふやうなものも神話の一種と看做すのであります。誰の幽靈といふやうに決つた人の幽靈でなく、たゞ何となく古い家な

どになると「おばけ」が出るなどといふ噂が立つたりすることがありますが、斯ういふ風に人々が勝手にその想像力で拵へ上げたこはいもの、おそろしいものをもすべて神話とみるのであります。

第二には魔物、魔の觀念であります。この著しい例は我が國の鬼であります、大きな角を生やしこはい顔をし、手足は毛むくぢやらで、赤い皮膚を持つものと青い皮膚を持つものとの二種があります。その他魔まの例としては大人おほひと、小人こひとなどといふたぐひもあります。小人は日本にはあまりありませんが西洋には小人の話がよくあります、よく圓錐形の帽をかぶり、ヒゲを地面の上まで垂らし年寄みたいな子供みtain得體の知れない顔附きをして居ります。斯ういふ魔の觀念も神話の一種と見られるのであります。

第三は動物を自分の祖先であると考へることであり、つまり自分の祖先は動物から出てゐると考へることなのであります、現今の文明人の

間にはさういふ考は少しもありません、しかし我々の祖先や現今でも野蠻人の間には斯ういふ考があるのであります。AならAといふ人の祖先がカングルー系統を惹いてゐる、と斯ういふ風に考へるのでありますから我々には一寸見當がつけかねます、中には熊を自分達の先祖であると考へてゐる野蠻人もあります。斯ういふ風に彼等を選んで以て自分達の先祖とする動物は單に彼等の想像を根柢として居るに過ぎないのであります。この考も神話の一種であります。もう斯うなつて來ると神話の神などといふことは全然當籤らなくなつて來ます。

第四は我々の祖先の心靈が今尙いづれかに在つて我々と交渉を持つて居り、我々を加護し、監督するといふやうに考へるのであります。この考が矢張神話の一種であります。

第五は神話の中で最も重要なもので、自然神話と名けられるのであります。日の神や嵐の神や

夜の神やが出て来て互ひにいろいろの交渉をするのであります。日本の古代神話をはじめ歐羅巴の古代神話も皆之に屬します。古事記や日本書紀にある神話はかなり發達した神話でありまして、この域に達する前のもつと幼稚な神話があるのであります。それは現今野蠻人の間に存して居るものであります。一番簡単な自然神話の形式はメルヘンであります。メルヘンは普通童話と譯して居ますがあまりいゝ譯ではありません、メルヘンは大人の野蠻人が喜んで聞くものでありますから童話といふのは少し當りません、私はメルヘンを小話と譯して用ゐやうと思ひます、小話といつても近頃文壇で問題にしてゐる小咄とは違ふのであります。自然神話にはいろいろ種類がありますが、大體に於て次の三種に大別することが出来ると思ひます。

- (1) 動物に關する小話
- (2) 天上に關する小話

### (3) 人間の運命に關する小話

動物に關する小話の一例として亞米利加のポニー(野蠻人の一種)の間に行はれてゐる神話をお話し致しませう、

一人の少年がその遊び仲間から離れ、森の中へ入つて生活してゐました。しかしその少年は或日のこと、牝の水牛をつれて歸つて來ました。その水牛は少年の妻だつたのです。而して二人の間には子供までありました。然るに是等の人々の間には不思議な習慣がありました、といふのは子供を地上に落とすと、その落した母も子も水牛に化して了ふといふのです、ところが不幸にしてさういふことが起りました。而して少年の子供は、水牛になつて了ひました。その少年は悲しんで森に行き自分も水牛になりました、而してしばらく安樂に暮してゐましたが又不圖人間になりたくなつて、元の人間になりましたこの少年は水牛になつてゐた頃、狩獵の秘密を

水牛から教つたので、水牛取りが特別に上手でした。それ以來この種族は水牛を取ることが上手になりました。

この話の行はれてゐるポーニー族は水牛を食料としてゐる種族であります。斯う云ふ取りとめのないやうな話が發達してインツプのやうなものとなるのですが、インツプのやうなものになるとも、う人が本當のこととは信じません、しかし今お話したやうな筋ですと野蠻人の間に於ては反つて本當のこととして信じられるのであります。

次ぎには第二の天上に關する小話の例として北米の土人の間に行はれてゐる神話をお話しいたします。

天上の會長日の人といふものが二人の美しい娘を持つてゐました、日の人はその娘に結婚させることを嫌つて、求婚者を片端から殺して予ひました。さて又茲に晴天といふ名の別の會長がありました。晴天は二人の息子を持つて居りま

した。晴天はその息子に「そんな風に用もなく毎日ブラ／＼してゐるならば日の人の娘の婿にもなるやうに運動したらよからう」と言ひました。子供は成程と思ひ、天にのぼる矢梯子を作りました。この矢梯子といふものは何うして作るかといふに、先づ一本の矢を天に向つて放しますとそれが天に突きさゝります、今度は第二の矢を第一の矢の矢筈に突きさゝるやうに放し第三の矢を第二の矢の矢筈に突きさゝるやうに放します。斯くの如くにして矢梯子が出來上るわけであります。二人の兄弟は矢梯子を攀ぢ上つて天に達しました。兄弟は盲女の一群に出會しました、盲女達は兄弟に日の人がなか／＼陰謀をめぐらすからそれにかゝらないやうにといろ／＼の策を授けました。兄弟は不思議な房を以て盲女の目をなほしてやりました、するとその女達は鴨に化けていづれへか飛び去つて了ひました。兄弟は尙も進んで行く中に、自分達

の祖父さんにあたる鶴に出會しました。鶴は不思議なまじなひによつて兄弟のお尻を石に化してやりました。やがて兄弟は日の人の娘のところへ達しました、日の人の姉妹娘は晴天の子供の兄弟を愛し、結婚しやうと思つて、自分達は晴天の子等と結婚したいと父に申出でました。

日の人は晴天の子を婿にするには試験を経てからでなければいけないといひました。兄弟は先づ第一の試験として針鼠の上に坐らせられた、兄弟のお尻は石になつてゐるのですから平氣で針鼠の上へ坐ることが出来ました。其他尙いろゝの試験を課せられたのでありますが兄弟は魔術を心得てゐましたので皆首尾よく及第しました。日の人は尙兄弟に薪を取つて來るやうに命じました、而してその留守に啄木鳥と兩頭の蛇に命じて兄弟を殺さしめやうと致しましたけれども兄弟はこの陰謀の裏を搔いて啄木鳥に日の人の眼を突き出させ、蛇にその眼を呑ま

せて了ひました。日の人を殺し之を地上に投げ棄て、了つた兄弟は日の人の姉妹娘と結婚しました。

右の如き話は天然神話のもとをなすものであつて、太陽とか晴天とかを主人公と致して居ります。

次ぎには第三の人間の運命に關する小話の例として亞弗利加のカファア人種の間に行はれてゐる話をいたしませう。

一人の青年シクルメといふものが旅をして居りました。お婆さんの注告によつてシクルメは石に油を塗つて携帶して居りました。シクルメの後から鬼が澤山追駈けて來ました。シクルメは油を塗つた石を鬼の群に向つて投げました、鬼は油の匂ひを嗅ぎ之を奪ひ合ひました、而して一匹の鬼はこの石を呑んで了ひました、するとこの石を呑んだ鬼を他の鬼が呑みました、その鬼を又他の鬼が呑みました。鬼がこんなことをし

て居る間に青年は自分の行く手と反對の側に外套を投げて、自分の行く手を晦まし、ドンドン進んで行きました。青年は途中で一人の友人に會ひました、その友人は青年に魔術を教へました。青年は友人から教つた魔術によつてあたりに落ちてゐた石を拾つて之を小屋に化へ、その中に入つて居りました。やがて鬼が追駈けて來て小屋ごと青年をバクリと呑んで了はうとしました、けれども小屋の正體は石でしたから鬼は齒をこはして了ひました。青年は尙旅をつづけて或る村に達しました、この村の人々は水中の怪物に惱まされて居ります、青年は村の人々を助けるために怪物を退治てやらうと決心して水中に飛び込み、わざと怪物に呑まれます、而して怪物の腹に穴をあけて、これまで呑まれてゐた村の人々を外へ出してやり、自分も出ました。青年はこの怪物の皮を剝いて家に持ちかへり、姉と妹にたのんで、その皮を以て外套と草鞋を

作つて貰ひます、而して遠方に住んでゐる會長の娘の愛を求めするために又旅立ちます。青年は會長の娘の氣に入りました。しかし青年は娘の母親のために鹿にされて了ひました。幸ひに娘が鹿を水の中に入れたら又元の人間になりました。青年と娘は玉子と牛乳袋と壺と石とを携へて駈落をしました。娘の父親が驚いて追駈けて來ましたので、青年は玉子を投げつけました、すると急に濃霧が生じてあたり一面眞白くなつて了ひました。青年と娘はドン／＼逃げて行きます、父親は又々直きに追ひ附きさうになりました、青年は今度は牛乳袋を投げつけました、すると急に大水が出て父親は追駈けて來られなくなりしました。青年と娘はドン／＼逃げて行きます、父親は又二人に追ひ附きさうになりました。青年は今度は壺を投げつけました、すると急に眞暗になつて了ひました。その次に又追ひ附かれさうになつた時には青年は石を投げつ

けました、するとその石が急に大きな岩になつて了つて、父親はもう何うしても後を追つて來ることが出來ないやうになりました、それで青年は酋長の娘をつれて故郷にかへりました。

右は人間の運命の變り易いことを説いて居るのであります、玉子を投げると濃霧が生ずるといふのは玉子の白味の色と霧の色とを聯想したのであります、壺を投げつけると暗黒になるといふのは、牛乳袋を投げると大水が出、石を投げると大岩になるといふのは、いづれも誇大して考へたのであります。

自然神話の形式としては小話に次いで、傳説といふのがあります、普通に傳説といふと廣い意味になります、が嚴密に傳説といふ字を用ひやうとすると一寸面倒であります。小話ですと時も所も不定で、出來事も荒唐無稽不可思議極まります、而して主人公は大抵子供か若者であります。然るに

傳説ですと主人公は大抵壯年で、時と所ももつとはつきりして來ますし、不可思議なこともずつと少なくなつて來ます。日本の昔の神話に於ける素盞鳴尊が出雲の簸ノ川上で八岐の大蛇を殺して叢雲劍を得、櫛名田姬を娶られたといふやうな話は傳説に屬するのであります、これは「昔々あるところに」といつた程度に漠然とした話ではありません。希臘の神話、英雄譚、ホーマーの「イリアード」「オデッセイ」ヘラクレスの話等も皆傳説であります。ヘラクレスの話を一寸搔抓んでお話ししてみますと、ヘラクレスはゼウズの子で、生後二ヶ月目にもう二匹の蛇を片手に一匹づゝ捉へて之を握り殺すほどの怪力を有してゐました。ヘラクレスは長じて、アポロから矢を貰ひ、その他の神々から劍や甲冑を貰ひます、さうして十乃至十二の冒險をするのであります、即ち獅子退治や野牛退治をします、又ヒドラといふ多頭の蛇を退治たり、半人半馬のケンタウルといふ怪物を退治たり



荒馬を鎮めたり、アマゾンといふ女軍と戦つて、その帯を分捕つて來たり、或る王の所有する牛小屋で三千頭の牛が入つてゐて三十年間も掃除せず  
に放棄してあつた手のつけられぬ程きたない牛小屋を一日の内に掃除したりします、又地獄へ行つて猛犬ケルベロスと戦つたり、巨人を締め殺したり龍を退治したりします、又巨人アトラスに代つて地球を肩の上に擔いてゐてやつたりします、まア斯ういふやうな話を傳説の見本とみることが出来るのであります。

次に小話、傳説に次いで、未來世界に關する話も亦神話の一種と見られるのであります。未來世界に關する話は自然神話の最後の形式であります。我が國に於ても太古は「とこよのくに」若しくは「よみのくに」といふやうな考へが祖先の間に行はれてゐたやうであります。かの有名な話であります伊弉諾神が伊弉冊尊を冥府に訪ねられた話などはこの例となるのであります。伊弉諾神は伊

弉冊尊の死を悼まれ、夜見國へ行かれますと夜見國にも現世と同じやうに家がありました、しかし燈がついてゐませんから何が何だか薩張り様子が分りません、それで一軒の家の中をのぞいて見ると丁度うまく伊弉冊尊が居られました、しかし尊の上に雷神がのしかゝつて居たので、伊弉諾神は驚いて現世へ逃げ歸られました、その時伊弉冊尊は豫ねて伊弉諾神にのぞいてはいけませんと約束してあつたのに、それを守られず、自分に恥を與へられたと言つて大いに憤られ、大勢の醜女をして伊弉諾神の後を追はしめられたのであります。それから先きは略しますが、とにかく人間が死んで後の世界に關する想像から産まれた話は自然神話の最も進んだものであります。こゝまで來ますと神話と藝術との關係がかなり密接なものであることは自然と分つて來るのであります。例へばホーマーの詩を讀んでも神話が一寸分らないやうなところもあります。しかし神話と詩の區別は

明かにつくわけであります。神話には信仰が伴ふのです、しかし詩其他の藝術には信仰が伴ひません、誰も本當だと信じはしません。ただ慰みとして讀むだけです、そこが違ふことになるのであります。ホーマー時代、若しくはホーマー以前の人々には「イリアード」や「オデッセイ」に書かれてあることは本當のこととして信せられてゐたに違ひありません。それは彼等の間に於て「イリアード」や「オデッセイ」が神話として取扱はれて居るからであります。しかしワグナーのオペラの中に出て来る不思議な世界を誰も本當とは信じません、しかしそれは藝術として世人から喜び迎へられます。

次ぎはいよいよ神話の心理のお話となります。

神話は何故に生ずるかといふ問ひに對して、ある一派の人々は智的要求より起るといふのであります、これはあまり信を措くことは出来ない説であります。未開時代に於ける人類は智的要求よりは寧ろ感情、意志の方面の要求から神話を生むと

みる方が至當であるやうに思ひます。

我々の想像作用の一種に合活想像といふのがあります。つまり活き合むる想像である、河なり山なりを自分と同じやうな生命のあるものと考へる想像であります。これは性格がはつきりしてゐる場合には擬人想像と言つてもいいのであります、合活想像と言つた方が意味が廣くて、都合がいいと思ひます。大暴風の物凄景色とか人の死ぬ様とかいふやうな自然なり人生なりに人間が對すると感情が強く起ります、而してこの強い感情を外に向つて投出します。例へば心内に起つた怖しいといふ感情を外に出して了つて、何か怖しいものが外にあるやうに考へます。運命の恐しさを經驗するとおそろしい運命といふものが自分以外に存在してゐて、自分を支配するやうに考へるのであります。これは皆合活想像の作用によるのであります。以上で神話を喚び起す心理作用は合活といふことであるといふことはお分りになつたらうと

思ひます。而してこの心理作用は必ず實在の感じを伴ふのであります。つまり神話を起す想像の二つの特性として、合活といふことゝ實在の感じといふことゝが數へられるわけであります。斯る心理作用が幼児心理の中にも著しく現はれるといふことは皆さんも既に御承知のことゝ思ひます。子供は木きれを合活して、之に話しかけるのであります。子供は又好んで神話を聞きたがります。神話でないまでも藝術的の假作話を好みます。これは子供の合活想像の要求を充たすからであります。

子供の想像と野蠻人の想像とはよく似てゐます。しかし子供の精神發達と野蠻から文明に至る人間の精神發達とを平行してゐると考へるのは少し違ふと思ひます。何故といふに一方は子供の發達であり、一方は生理的にも身體的にも大人である人間の發達でありますから、其處に於て明かに違ふわけです。野蠻人は大人ですから社會的生活

や性的生活を營んで居ります、しかし子供には未だ斯る生活は芽ぐんで居りません。それから又子供の方から言ひますと、子供は生れながら文明人の大人の側で育ちます。それ故文明の影響を受けます、つまり環境が文明的であります。それ故子供の精神作用の發達は早いのであります。子供の眞の精神發達を調べるためには子供を南洋の離れ島にでも連れて行つてかなす鳥にでも育てさせながら實驗しなければ分らないといふやうなことになります。これはあまり極端な話で無論出來ない相談であります。斯うでもしなければ、子供特有の幼稚な精神發達を一步々々に研究することは六ヶ敷いのであります。未開から文明へ達する道程に於て自然な精神發達があるわけです。未開人の發達と子供の發達とは各の發達を考察する場合に互ひに相補ふ便利はありますが、この兩發達の順序は全然平行して居るものではありません。

次に述べることは餘論としてありますが、

子供に聞かせる話の材料として文明人間に行はれてゐる話のみでなく、これまで例にあげたやうな野蠻人の間に行はれるやうな話をも少しく變形して、取り入れてみたら何うかといふことであります。尤も野蠻人の話を集めた便利な本は未だないやうでありますが、或る程度まで集つて居るのでありますからこれを利用されたい、と思ひます。

第二には子供に聞かせる話だからといつて、あまり合活法を用ゐすぎると反つて効果を薄めるやうなことになるります。野蠻人といへども何でも彼でも合活するのではありません。特に自分の感情を激發させるものだけを合活するのであります。子供もこれと同じことであります。子供は話を聞いてゐる時には遊んでゐる時ほど合活想像を働かせません。藝術的の童話でもグリムあたりはまだ子供に分ります、しかしアンダーセンやアラビヤン・ナイトになると子供の擬人想像を誇大視してゐるために反つて子供には難解となり、従つて喜ばれません。アンダーセンの「錫の兵隊」などは子

供にはあまり面白い話ではありません。

第三に子供に聞かせる話は科學や道徳に拘泥する必要がないといふことであります。科學や道徳のことを矢笠しく言ふと子供の想像の世界を破壊することになります。子供には野蠻人と同じくまだ今日の發達したる科學も道徳もないのであります。矢梯子などといふものは科學的には決して出来るものではないのであります。子供の世界に於ては、これが可能なこととしてあつて一向差支ないのであります。又自分の姑となるべき日の人の眼玉を啄木鳥に突き出させ、剩へそれを蛇に食べさせて了ふなどといふことは以ての外の不道徳ですが、斯う話さなければ野蠻人には面白くないのです、しかし斯ういふ際立つた不道徳はそのまま我々の子供の耳に入れるわけには行きませんから、そこは少しく匙加減を要すること、思ひます。何うせ教育のことですから子供の本性にのみ従つてゐてはいけないのであります。さればと言つて子供の想像作用を抑へて了ふやうなこともいけないと思ひます。(文責在記者)